

V 多様性を尊重する生徒を育てる高等学校の指導

はじめに

高等学校には、障害や不登校、学習内容の未定着、家庭の経済状況、日本語能力の問題等、以前にもまして多種多様な生徒が入学してくるようになっている。また、日本の急速な国際化、グローバル化は、海外で生まれ育った、異なった価値意識や社会規範、行動規則をもつ生徒も増えている。

高等学校では、家庭の経済状況の課題解決のために、授業料の減免や無償化の取り組み、教材費等の私費負担の軽減が公的負担や各学校の努力によって進められている。また、不登校やいじめなど様々な問題に対応するために、スクールカウンセラーが配置されるとともに、公的な相談窓口が設置されるようになっている。

東京都教育委員会では、研修を受けた教員の中から特別支援教育コーディネーターを指定しすべての都立高等学校に配置するとともに、特別支援学校と連携した教育課程の在り方、生徒指導について対応している。

不登校や学習内容の未定着の生徒を応援する学校として、昼間定時制、単位制の総合学科の高等学校をチャレンジスクールに指定している。また、学習内容の未定着の生徒を応援する全日制普通科、専門学科の学校からエンカレッジスクールを指定している。

学習内容の未定着の生徒には、海外で生まれ育った生徒や日本で生まれた外国籍の生徒も含めている。

現代の豊かな社会に育った高校生は、身近な生活に満足している限り、現状に追随し、多数に同調して大勢順応に流れやすく、社会的な課題に興味を示さない傾向にある。自他の間に壁を作って、排除や無理解など、多様な文化や個性、社会的な課題などに対して無関心となっている。

高校生は、社会人となれば、共通の課題や仕事に取り組む過程で、自分とは異なる異質な文化や他者の個性や意見を認め多様性を尊重し、協働していくことが求められる。

これらの課題解決のために、すべての学校でできることは、特別活動の充実と重視されている道徳教育の具現化を図り、人の「多様性」を尊重し、「共生していく」ことを重視した取り組みと、学校が生徒にとって安全、安心な居場所となるような教育課程の改善、施設などの改善などを行うことが必要である。

校長が学校改革の一環として行った事例をとおして、成果を上げる「多様性を尊重する生徒を育てる」高等学校の指導について考える。

生徒が生き生きと活躍できる学校を作る実践

事例1 生徒の育ちの姿を発信する

多様性を尊重する生徒の育成には、保護者、地域との連携と協力が必要である。

地域や保護者からの苦情やクレームは、学校の様子や生徒の態度・行動が見えることによって増えてくる。しかし、その対応を学校への励ましととらえ生徒指導や教職員の仕事の仕方、接遇の改善に結びつけることによって改善できものが多くある。学校の様子や生徒の態度・行動の変化を「見える化」することは、学校経営の基本であり、その実践こそ特別活動の活用でありたい。

特に生徒の規範意識の向上は、生徒自身が見られている自分が認められていると感じた時に飛躍的に向上する。

文化祭や体育祭など多くの保護者や地域の方々が集まる場を利用して、生徒の成長した姿を直接御覧いただき、朝練や放課後の部活動では、あいさつを大きな声で行わせる。学校周辺の清掃活動を部活動の一環として行わせるなど、生徒の姿が学校外に見えるようにすることが大切である。

日頃生徒の学校内での姿を見ることのできない地域住民を積極的に行事に招待し、地元の保育園児や小中学生が参加できるプログラムを工夫するなど、通学路や地元商店街等から苦情のある生徒とは違った生徒の姿を「見せる」ことに留意することが大切である。

生徒会の役員による市主催行事への参加、地域ボランティア活動の実施、教職員から生徒や外来者への声掛け、生徒同士の挨拶運動の実施など生徒自らが活躍できることが重要である。また、保護者に弁当持参のお願いを担任から行うだけでなく、生徒自らが弁当を作ることができるように、家庭科の授業を連携して指導させるなど、教科を巻き込んだ取り組みが大切である。

事例2 直接語りかける場を活用する

特別活動の中で校長が直接関われるものに学校行事がある。校長にとって入学式、卒業式、始業式や終業式は、生徒に直接話のできるチャンスである。また、文化祭や体育祭、合唱祭などの学校行事や吹奏楽部の定期演奏会など校長が生徒の前で話す機会は意外と多い。

校長は、その機会を特別活動の活性化とともに、人の「多様性」を尊重し、「共生していく」ことを重視した共生教育の視点をふまえて、生徒の規範意識の向上や学校の教育目標の具現化のためのチャンスと捉えたい。

多様性を尊重する生徒の育成の視点から毎回何を話すか決めて、学校便りともリンクさせ、話を用意することが大切である。時によっては、生活指導主任や司会の庶務主任等あらかじめ内容を伝え、より具体的な話や補足をしてもらうことが効果を上げる方法である。

校長がそれぞれの行事の目標や生徒への思いを語る時、特に失敗した経験談を語った時、必ずや変化が現れる。

生徒、保護者、或いは地域住民等への情報発信、語りかけとして、学校便りを年発行することは、ホームページの活用とともに効果のある取り組みである。学校便りでは、校長として生徒に常に求めていることや考えてほしいことを先人のことばや経験談、本からの抜粋、自分自身の経験などから、多少難しい内容になるように意識して考えることが大切である。

それは、生徒だけではなく、保護者、地域住民にも読んでもらうためである。副次的な効果として、教職員に校長の方針や思いを伝えるよい場となる。

校長が特別活動に対して目配りをすることによって、担任がクラス経営のあり方や方法に工夫を加え、学年会の話題にホームルーム活動が取り上げられ、各行事が活性化するだけでなく、各行事の内容のレベルアップにもつながる。

事例3 教育課程を改善し学校に生徒の居場所を作る

勉強は本来厳しく辛いものである。そして、その厳しさ辛さがあるからこそ乗り越えた時に充実感、達成感を感じることができる。

・教育課程の見直しと改善では、生徒の多様なニーズに合わせた選択講座、学校設定科目を設置するとともに、定期考査について見直し、考査の点数だけによる評価を改め多様な視点からの評価を取り入れる。

・朝学習の実施（1時限目授業前10分間）復習を中心とした学習課題を用意する。

・国語（古典）、数学、英語の少人数、習熟度による授業について、2時限分を30分授業3時限で展開し、生徒の学習状況に応じたきめ細かい指導を行う。

・アクティブ・ラーニングの導入など、授業内容、方法の改善を行う。

・体験的な学習（落語、茶道、華道、園芸、エアロビクス、ゲーム、囲碁、将棋など）を教育課程に位置付け、生徒を得意な分野で評価できるようにする。

評価の在り方を見直し、課題のある生徒や、学習内容の未定着の生徒について、放課後、長期休業中の補習を実施し、教室外の学習や補習の成果を成績に反映させる。

多様な背景や環境をもつ生徒が楽しく充実した学校生活を送る一番の方法は、居場所作りである。不登校経験者や他者との協調性に課題のある生徒にとって、教室以外の居場所があることは、大変重要である。

生徒にとって、自分の居場所があり、自分自身を認めることができる時に、初めて他者の存在や違いに気づくことができる。

クラス、委員会、部活動、或いは、図書館やちょっとした語らいの場など、人間関係の場、物理的な場など生徒の居場所作りを校長が学校経営に位置付け、生徒一人一人を大切にしているというメッセージを発信することによって、生徒が、学校は楽しいと言える、安心して学べる居場所をそこに作るができる。

事例4 教職員の経営参画意識を育てる

校長が組織、教職員を引っ張るリーダーシップ対して、教職員の立場で組織や同僚を支えるフォロアーシップがある。

20年ほど前にフォロワーシップを体系的に解説して重要性を唱えたロバート・ケリー教授（米国カーネギー・メロン大学）は、その思考・行動傾向を「貢献力」と「批判力」という2軸から説明している。「貢献力」とは、与えられた役割を受け入れて忠実に取り組む意

識や行動である。また「批判力」は、既定の役割や上司からの指示について自分で考え、主張する意識、行動である。なぜこの2軸が重要なのか、それは複雑性の増す環境下で、正解が1つではない課題に速やかに着手し、行動しながら学び、修正しながら進む組織全体の学習力が必要だからである。そこでは必ずしもベターではない自分の役割や状況自体を受け入れること（貢献力）も、組織の一員として必要であり、同時に、全体最適に向けて自分の見解を表明し、多様な視点を混ぜ合わせる中で、組織の集合知レベルを上げる姿勢（批判力）も必要であるということである。

これは、校長や教頭などの上司からの指示やアドバイスを受動的な態度で待つだけではなく、自主的な判断や行動を伴って、組織としての成果を最大限にするための取り組みや行動をすることである。

学校は、この二つの要素が相乗効果を上げることによって、教育の成果をあげることができる。

学習指導要領の解説に、「特別活動の深い学びとして、すべての生徒が集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組む中で、互いのよさや個性、多様な考えを認め合い、等しく合意形成に関わり役割を担うようにすることを重視する」とあるが、「生徒が」を「教職員が」と直してみると、教育のために教職員が何に留意しなければならないかを理解することができる。

教員には、以下の内容を徹底した。

- ・ 生徒への支援的な声掛け
- ・ 生徒理解及び課題のある生徒情報の共有化
- ・ 授業方法の改善
- ・ 評価の柔軟化
- ・ 校内研修の実施

事例から見えてくること

校長は、教職員、生徒、保護者を信頼し任せることから始めることが大切である。

新たなことを始めるには、必ず抵抗がある。生徒指導の在り方や方法を変えることは、管理的な指導に慣れた教職員にとって不安があり、授業規律や出欠席を重視する教員や定期テスト等の点数や成績にこだわる教員にとって、授業方法や評価の在り方を変えることには、大きな抵抗がある。

これらの不安や抵抗を取り除くために、教職員一人一人と面談し学年会、分掌部会、教科会に具体的な提案や指導助言を行い、納得の上で、まず、できるところから実現させたい。

成果を上げる学校の条件は、①気持ちのそろった教職員集団②戦略的で柔軟な学校運営③豊かなつながりを生み出す生徒指導④すべての生徒の学びを支える学習指導⑤ともに育つ地域・校種間連携⑥双方向的な家庭とのかかわり⑦安心して学べる学校環境⑧前向きで活動的な学校文化、の8つの要素である。

「多様性を尊重する生徒を育てる」学校の具現化のためには、「校長が変われば学校が変わる」と言われるが、校長が変わるだけでなく、教職員が変わり、保護者、地域が変わり、生徒が変わるという循環を作ることが必要である。

山本五十六の有名な言葉に「やってみせ、言って聞かせて、させてみて褒めてやらねば、人は動かない」というのがある。この言葉は、「見本を見せ、説明し、やらせて褒める。そうすれば人は動くよ」という意味である。見本を見せるだけ、説明するだけ、やらせるだけでは、人は動かないよ、ということを教訓的に教えてくれている。

人を動かす原理原則は、まず、「方法」である。これは「やってみせ」の部分に当たる。どんな活動でも方法をまず教えなければならない。次に「価値」を見いださないと人は動かない。「言って聞かせて」つまり、仕事の意義・価値を語り聞かせなければいけないということである。そして、「させてみて、褒めてやらねば」は、「体験させて、納得させる」ことである。教員にとっても仕事に対する達成感、やる気、モチベーションを高める体験が必要である。

校長は、今だけではなく、常に一歩先、二歩先を見据えた学校経営を考えたい。その上で、「方法」「価値」「経験」この三つのことを自分の言葉で語れるようにしておきたい。

提言

高校生は、社会人となれば、共通の課題や仕事に取り組む過程で、自分とは異なる異質な文化や他者の個性や意見を認め多様性を尊重し、協働していくことが求められる。

高等学校で「多様性を尊重する生徒を育てる」ために、学校でできることは、生徒が集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組む中で、互いのよさや個性、多様な考えを認め合い、等しく合意形成に関わり役割を担えるようにすることである。

そのためには特別活動の充実と重視されている道徳教育の具現化を図り、人の「多様性」を尊重し、「共生していく」ことを重視した取り組みと、学校が生徒にとって安全、安心な居場所となるような教育課程の改善、施設などの改善などを行うことが必要である。